「昭和13(1938)年の阪神大水害」についての聞き取り調査報告書

神戸市立赤塚山高等学校　地歴部

はじめに

平成５年度の本校文化祭で、地歴部の研究成果の発表内容が、昭和13年７月に阪神地区一帯に大きな被害をもたらした「阪神大水害」をテーマにしたものでした。その内容の中心をなすものは、当時被害に遭った人達への聞き取り調査でした。すでに災害から55年が経過しており、この災害を体験した人達も、現在生存されている人は少なくなっており、生存されている人もかなりの高齢になっておられます。当時の状況をうつした写真は残っておりますが、写真ではわからない生々しい災害の悲惨な様子は、実際に体験した人達でなければ証言できません。この貴重な被災者の証言は、単に文化祭の発表にとどめないで、これを冊子にして永久に保存できれば、貴重な歴史の資料になるのではと、本校後援会の援助により、小冊子にすることができました。

大水害以来、種々の防災対策事業が施工され、再びこの地に、このような災害は発生しないものと信じておりますが自然災害はこれを完全にくい止めることはできません。雲仙普賢岳では、いまだに火砕流や土石流が流れ、多くの被害を出しており、避難生活をしている人達は３度目の夏を迎えております。つい先日は、北海道南西沖地震が発生し、奥尻島では大津波や火災にも襲われ、大勢の死者を出しております。私たちは、過去の災害に学び、少しでも被害が小さくなるよう常に備えなければなりません。この冊子が多くの人達に読まれ、防災のお役に立てば幸いです。

平成５年８月

神戸市立赤塚山高等学校長　長　尾　次　郎

「聞き取り調査」をおこなって

91年度・92年度と、我が赤塚山高校地歴部は身近な石造遺物である道標（みちしるべ）を研究の対象としてきた。93年度はものを言わぬ遺物ではなく、「人」との関わりを通して歴史を研究したいと話し合った。

何をテーマに何から始めたらよいのかと困っていた時、部長の家の壇那寺である西方寺（神戸市東灘区御影）の檀家の方々に御協力いただくことになった。92年の７月に西方寺でお部屋をお借りし、町の歴史や、阪神大水害の体験談、太平洋戦争の頃の生活などを、檀家の方々から世間話も交えつつお話いただいた。

その後の話合いで、今回の研究テーマを「阪神大水害」に絞り、神戸市立中央図書館や、神戸海洋気象台等を利用して、正確な資料を集め、予備知識をつけることにした。そして、当時を知る方々からの直接の聞き取り調査を中心とした研究を始めた。

まず手初めとして、93年の２月、先日お話をいろいろうかがった西方寺の檀家の方々に、もう一度「阪神大水害」に的を絞ってお話を伺うことにした。しかし、私達が目の前でお話をメモやテープレコーダーなどで事細かに記録し、堅苦しい雰囲気を作ってしまったせいか、前回の和やかな雰囲気とは違い、どの方も一様に「間違ったことは、言えない。」と緊張され、話も弾まなかった。私達がついつい自分の気持ちを前面に出し過ぎて、まるで尋問か何かを受けているような感じを皆さんに与えてしまったようである。大変、失礼なことをしてしまったと、反省している。

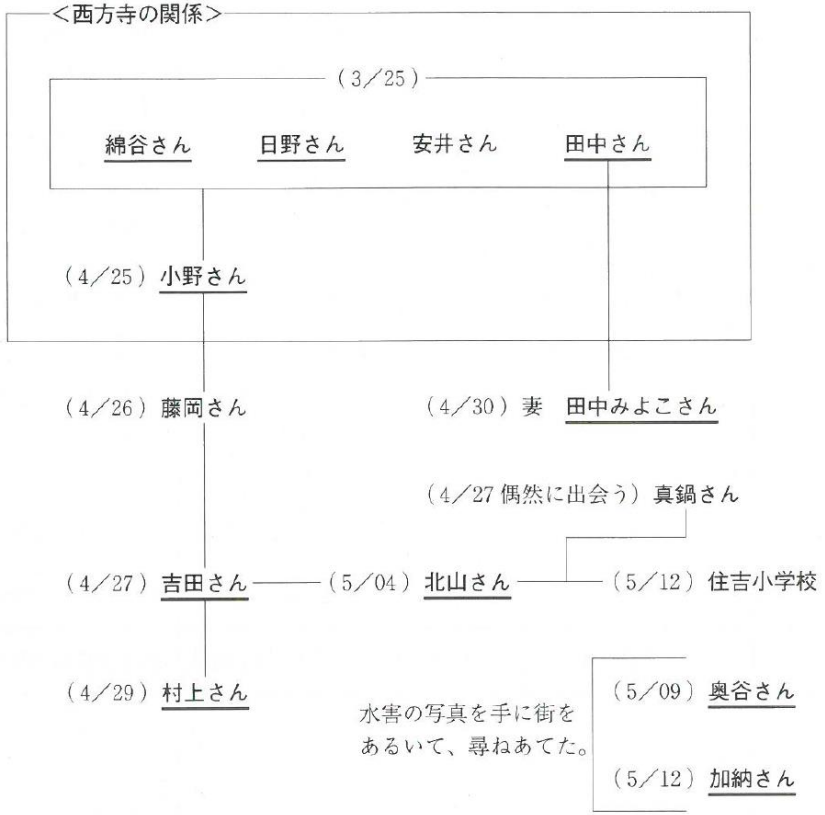
その後は、同じ失敗をくり返さぬよう注意したためか、たくさんの方々のお話を、自然な雰囲気の中でお聞きすることができた。また、当時を知る人を次から次へと紹介していただき、その方々を訪ねていくうちに、面白いほど人間関係の輪が拡がった。最終的に、水害に関する実際の体験談をお聞かせいただいた方は、10人にのぼった。

そして、お話を伺った方々が、私たちの活動に役立つようにと、いろいろな昔の資料を提供してくださり、たいへん感謝している。

特に今回注目すべきは、綿谷輝郎さんが提供してくださった、阪神大水害当時の数十枚の写真である。調査をすすめるうちに、この写真がたいへん重要な資料であることがわかった。

聞き取り調査については、後でテープレコーダーから、文章になおした。写真については、お借りしたアルバムから、自分達で複写し、現像・焼き付けまで本校の暗室ですべて自分達で行った。全く初めての経験なので、未熟な仕上がりになったが、貴重な資料を後世に残すことが出来、自分達は満足している。

今回の聞き取り調査における関係図



＊――は、水害の直接の体験を伺った方。

神戸海洋気象台のデータによる「阪神大水害」時の降水量

（図表１）　昭和13（1938）年６月29日より７月６日迄の１日の雨量
観測地点　住吉観測所（現在地：神戸市東灘区神戸市立御影工業高校）　単位　mm

	6／29	6／30	7／01	7／02	7／03	7／04	7／05	7／06
雨　量	0	0.2	8.5	3.0	100.0	263.5	73.4	0

（図表２）　昭和13（1938）年７月１日より７月６日迄の４時間単位の雨量
観測地点　神戸海洋気象台（現：神戸市中央区）　単位　mm

時刻／月日	22時～2時	2時～6時	6時～10時	10時～14時	14時～18時	18時～22時	総計	1時間あたり 最大	1時間あたり その時間
7／01	0	0	0.5	0.3	0.1	0.4	1.3	1.1	22時22分～23時22分
7／02	4.3	1.5	0	0.1	1.0	0.3	7.2	1.5	01時15分～02時15分
7／03	2.3	1.7	1.1	0.2	0.4	43.9	49.6	18.2	21時10分～22時10分
7／04	18.5	23.8	26.1	22.3	45.3	5.8	141.8	17.2	14時06分～15時06分
7／05	15.8	49.1	103.3	102.2	0	0	270.4	60.8	09時36分～10時36分
7／06	0	0	0	0	0	0	0	0.5	22時55分～23時20分

神戸海洋気象台を訪れ、直接『観測所調書』から抜き出したデータである。その際に、気象台の測候の方々からデータの扱い方、調べ方などのアドバイスをいただいた。また本校文化祭で、この資料を展示した際に、洪水の当日である７月５日の雨量が（資料１）と（資料２）のあいだで大きく隔たりがあることに対して、誤りではないかという指摘を受けた。これについては、後日ふたたび気象台を訪れ確認をした結果、次のことがわかった。昭和13年当時は、観測の日改時間が午前10時であったらしい。そのため、聞き取り調査の内容で、一番激しい雨が降っていたとされる５日午前９時頃の雨量は、（資料２）では前日４日の数字に含まれているとのことである。

建設省六甲砂防工事事務所における調査

六甲山に対しては、明治以降、植林や砂防ダムの建築など、数々の治水対策がとられてきた。今回の私たちの調査に対して六甲砂防工事事務所の方々は、様々な内容の書類や、広報資料を提供していただき、次のテーマを前提にお話を伺った。

「阪神大水害をふまえ、現在の水害対策についての問題点を考える」

・昭和13年当時に比べ、砂防ダムの建設や、砂防植林等の水害対策を行っているので、大きな川での水害①は防ぐことができると考えられる。しかし、小さな谷などのまだ対策が十分に行き届いていない地域があり、そこから当時とは異なった形態の水害がおこる恐れがある。

人口の増加、宅地の造成の結果②の森林の伐採による山林の保水力の低下、山の斜面の開発③などで、山裾での土砂災害の危険性が心配される。

水害、特に土砂災害は予想が困難である。こういった災害が起こりそうな場合は、個人個人の注意と、すばやい非難が大切である。

―― ①……昭和13年の阪神大水害においては、神戸市内の主要な川を中心に被害が広がった。聞き取り調査でも、東灘区に関しては「住吉川、石屋川」の氾濫が中心であり、川筋を外れると、例えば省線（現在のＪＲ）六甲道駅の前のパン屋さんは洪水翌日も平常どおり営業していたように、ほとんど洪水を意識させない地域もあったようである。

―― ②……東灘区においても戦後、大規模な住宅地、鴨子ケ原や渦森台などの開発が行われた。

―― ③……山が海に迫っている神戸市では、斜面に多くの住宅が建てられている。本校周辺も急な斜面であるが、住宅が密集している。それらのほとんどが、戦後の開発である。

東灘消防署で行っている水害対策

危険な地域には防災警報３号がでると、非難命令が出るようになっている。また浸水等のときは、人命を第一に考えている。

神戸市の防災計画書をもとに、各消防署も防災計画をつくっている。大雨の時、量水標（住吉川２ケ所、石屋川２ケ所、天井川、高橋川）６ケ所をパトロールする。また、危険箇所27ケ所について、非難場所が載った地域表を、毎年１回つくっている。

綿谷輝郎さん

[男性、78歳、大正4年生、洪水当時 23歳]

昭和13年7月5日、朝8時頃、雨が降っていたので家を出ようかどうかと、様子をみていた。いつもより30分遅れて、国鉄の六甲道駅から電車に乗り、大阪の学校（関西大学）へ登校した。

下校時、午後4時頃、千里山線の中でだんだん状況がわかってきた。国鉄・阪急・阪神が全面不通と知り、初めて被害の大きさがわかってきた。友人3人と梅田まで出てきて、阪急電車に関して「夙川迄は運転中、以西は不通」の掲示をみた。友人と別れ、阪急電車で、まずは夙川までやってきた。

夙川からは、不通で電車の止まった線路を、他の通勤客と一緒に西へ向かいテクテク歩いた。真っ暗だったので、場所も方向もわからず、ただ線路を歩いていたが、途中で阪急電車の箱（何か道具箱のようなもの）に芦屋川と書いてあるのを見つけ、やっとそこが芦屋であることがわかった。そこからは線路沿いには進めず、南へ下がり阪神国道（現国道2号線）を西へ歩いた。途中田中（現東灘区）のあたりから土砂・流木があり、住吉川あたりまで来ると胸まで水があった。それをみて、水害を実感した。

がれきのため、住吉川付近から国道を歩くことが出来ず、住吉川を渡ることが出来なかったので川の東側を北に向かって歩いた。途中、ロープが3本渡してあり、ここで命綱をつけ、警防団の人達に助けられながら、川の中を腰まで水に浸かって横歩きで渡った。命がけであった。国鉄の住吉駅周辺は砂地のようで、ぬかるんでいた。また、石屋川では、水位が堤防の路面まで達していた。家にたどり着いたのは、夜の11時前であった。

家の庭は堀の高さまで砂で埋まっていた。家の中はタンスの2段目か3段目のあたりまで水の来た跡が残っていた。足の不自由だった母は、近所の大工さんが避難させてくれていた。兄は会社、弟は友人宅へと、それぞれ別々の場所に泊めてもらった。ただ、忘れもしないのは、父が2階への階段の2段目か3段目かに腰かけて、茫然としていた姿である。

翌日から学徒奉仕団がやってきて、片付けを手伝ってくれた。そのとき昼食のパンを灘まで買いにいった。（石屋川を西へ離れると商店は普通通り営業していたようであり、被害は川筋に集中していたとおもわれる。）

家の土を全部外に出すのに、20人がかりで3日かかった。

（1993年3月25日、5月11日談）

日野富弘さん

[男性、74歳、大正8年生、洪水当時大阪在住 19歳]

7月6日か7日の朝、大阪の天保山から船に乗りメリケン波止場か中突堤の辺りで降り、そこから野寄（現東灘区）の親戚の家につまった土砂を掘り出しにいった。被害の状況をみて、強烈な印象をうけた。阪神国道（現国道2号線）が巨木や丸太で塞がれていて、不通であった。

親戚の家は1階の天井の高さまで土砂が埋まっていて、1日目は5～6人がかりで仏壇を掘り出すのがやっとだった。家の中に、入口よりも大きな石が入っており、どうやって入ったのか、本当に不思議であった。またなんともいえない山土の臭いが残った。野寄や観音林は特にひどく、観音林の人達は船を出して行き来をしていた。

流木は流れてくる間に皮が剥かれ、それは奇麗なものであった。聞いた話では、「山から水が噴き出した。」そうだ。

当時、大阪から神戸まで臨時の船が出ていた。

（1993年3月25日、5月1日談）

田中三千代さん

[男性、83歳、明治43年うまれ、洪水当時 28歳]

白鶴酒造の新場蔵（しんばぐら：現東灘区住吉南町）と呼ばれる当時最新式の室温調整装置のついた酒蔵で、電気係として従事していた。この蔵は多くの全国の酒造業者が見学に訪れるような白鶴酒造でも中心的な蔵であった。

7月5日は、仕事で朝から冷房を動かしていた。今までに経験したことのないような雨が続き、だんだんと足首位までの水が出てきた。これは普通の透明な雨水であった。そのうち、蔵のよこの小さな川から水があふれ、腰のあたりの高さまで、真っ赤な泥水があふれ始めた。

午前11時半頃、蔵の大屋根に登って水の様子を眺めていたが、足を滑らせてしまい、約15メートルの高さから転落してしまった。しかし相当量の水が溜まっていたので命は助かった。その後、蔵から5～6分のところにある本社に戻って食事をとり、会社の寮（現東灘区国道43号線北側和菓子屋「とらや」の西隣）に戻って休んだ。

水害から2～3日してから、蔵人（くらびと）三役、つまり杜氏（とうじ）・頭（かしら）・大師（だいし）ら100人位が丹波の方からそれぞれ1人1升の米をもってやってきた。土

砂を取り除く作業を手伝い、日当と１升２合の酒をもらって、喜んで帰っていった。（１升の米から、１升２合の酒が出来るとのこと）

（1993年３月25日、４月30日談）

小野　栄さん

[男性、88歳、明治38年生、洪水当時 33歳]

住吉駅の辺りは60センチ～70センチ水が溜まっていた。雨のしぶきがきついため霧のようになり視界が悪かった。住吉川の方から体中泥だらけ、足から髪まで泥まみれの人達が避難してきた。駅のホームは砂まみれであったらしく、女の人が裸で倒れて亡くなっていたが、みんな自分達のことで精一杯であったため、かまっている暇がない状態であった。

長女の小学校から「自分の子供を迎えにきてください。」という連絡が入ったため、急いで迎えにいった。水害のため、出口を土で塞がれていたため、校舎の壁に穴をつるはしであけて外に避難をしていた。(写真②)　長女を家に連れて帰ると、今度は長男を幼稚園に迎えにいった。長男を家に連れて帰り、ようやくほっとできた。

家の床下まで水が溜まっていた。子供を連れて師範学校（現市立御影工業高の場所）の体育館に避難して２晩をそこで過ごした。雨はやんでいたが空は真っ黒で、これからどうなるのか不安であった。

青年団（警防団）に入っていたので、近所のお寺（阿弥陀寺）に炊き出しに行った。水害で食事がつくれなかった人達のためにつくった握り飯であったが、こちらのほうはあまり被害が大きくなかったので、握り飯があまってしまった。そのまま１日おいておくと臭いがしてきたので、もったいないと皆で焼きおにぎりにして、食べてしまった。

水害の後、あるところでは、家にたまっていた土を外に出し積んでいたところ、その後の大雨が降ったとき、水が外に出て行かなくてひどい目にあったということだ。

また、川には砂が溜まり、橋の上にも土砂が積もったため、以前の橋の上に新しい橋（橋上橋）をつくったそうである。

（1993年４月25日談）

吉田和子さん

[女性、70歳、大正12年生、洪水当時 15歳]

２週間ぐらい雨が降り続いていた。その時は大水害になるとは思っていなかった。唯、「たくさん降っているなあ。」というかんじで見ていた。当日も朝早く（だいたい７時半

頃か）から雨が降っていた。いつもどうり、通っていた神戸市立第一高等女学校に登校するため家を出たが、省線（国鉄）電車に乗りいつもなら神戸駅で降りるのだが、この日は雨がひどいため、三宮駅で降り、市電に乗り換えた。（湊川公園で下車）

雨は止まず、午後２時頃から雨水がだんだん学校の校舎内に入ってきた。１階にいた上級生は、昇降口で水の汲み出し作業をしていた。そのとき自分は、自宅がどうなっているのかもしらず、ただ「凄いなあ。」と見ていた。下校時間になったが、とても帰れるような状態ではなかった。東のほうの被害がひどいということで被害のあまりでていない地区の人は下校を許されたが、それ以外は迎えの人が来るまで帰ることは許されなかった。

夜の10時頃になって、近所に住む友人のお父さんが迎えに来られたので、一緒に帰ることにした。電車は神戸駅から灘駅までしか走っておらず、灘駅からは線路の枕木の上を歩いて帰った。

帰ってきても、真っ暗なので、最初は自分の家がどこにあるのかわからなかった。そして、この写真のように家が壊れていたため、大変ショックであった。(写真①)　自分の親は、住吉神社の西にある祖母の家に避難していた。

家の１階は、おそらく大きな石が流れて通ったらしく、全てのものが流されていた。２階は無事であったが、１階は柱まで流されていたので、家が傾きかけていた。２階には大切な衣類が入ったタンスがあったので、近所の人に頼んで丸太ん棒で支えてもらった。１階にあった仏壇は、流れてきた肥やし車によって、流されずにすんだ。

すぐ隣の家は１階まで土砂に埋まっていたらしく、男子校の生徒が、夏休み返上で土砂

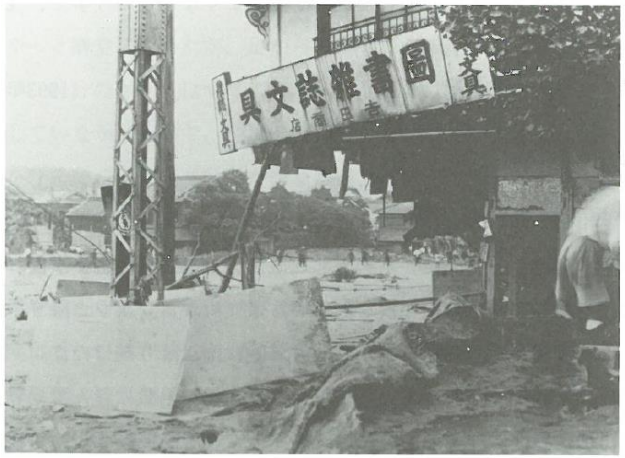


写真 ①

のかきだし作業をしたそうである。

母は、午前9時過ぎに、警防団の人から「逃げなさい。」と言われ、道路の向かい側の吉田区会館へ、ロープを伝って逃げようとした。しかし、水は胸のあたりまであり、そのうえ浴衣だったので、袖からどんどん泥水が入り、足を捕られたりしたそうである。後で、「逃げるのも命がけであった」と話していた。

(1993年4月27日、5月12日談)

田中みよこ さん

[女性、80歳、大正2年生、洪水当時 24歳]

当時、南北に通っている大通りの西側、御旅公園の南側のあたり、洪水の当日昼頃、気づかないうちに家の外に水が流れていた。しかし家を立て替えたばかりであったので、まわりの家よりも、少し高くなっていたので、床下浸水ですんだ。ただし、ぎりぎりの所までは水がきて、畳が浮きかけていた。まわりの家は床上浸水であった。

水害当時、夏だったので、勝手口の戸を開けていた。そこから土間の方へ、泥土や、うなぎ屋のうなぎ、チリ箱などまで流されてきた。家の場所は海に近いほうだったので、上からどんどん水が流れてきて、なかなか水がひかなかった。家の中で、どうしようかと大変不安であった。日が暮れる頃、ようやく水がひいたので、預かっていた妹の子供を、近くの妹の家に連れて帰った。妹の家はひどい状態で、床上浸水していたため、妹は姑の家に避難していた。

水害の後、片付けで土をとりのぞいた後、衛生上よくないという事で、役場が石灰をまくように、配ってくれた。

(1993年4月30日談)

村上吉胤 さん

[男性、88歳、明治39年生、洪水当時 33歳]

当時住吉小学校に勤務していた。水害の起こる前の日曜日、住吉小学校の職員の人達と、西宮球場に相撲を観に出かけた。相撲を観ていると、雨がポツポツと降り始め、ついには、相撲が中止になる程降り始めた。それから2日3晩、雨は降り続けた。

7月5日は、雨がたくさん降っているので、ズボンを風呂敷に包んで出勤した。雨は相当ひどい降り方であった。いつも通りに授業を始めた。1時間目の授業が終了したとき、

隣の組の担任の和田先生が「夫が出征するため、見送りがしたいので帰らしてください。」と言ってきたので、「早く、帰りなさい。」と帰らした。和田先生の組も引き受けたので、2つのクラスの授業を持つこととなり、隣の組には算術、自分の組には書き取りというふうに、2つのクラスを行ったり来たりしていた。

側溝の水がいつもより増水していたため心配していると、そのうちに学校の方にも流れてきた。2階の教室から1階に降りてみると、わたり廊下の辺りでは、足のくるぶしあたりまでくる水が流れていた。「こんなとこに、水が流れるのはおかしい。」と考え、1階におられた首席(教頭)の塚本先生のところに相談にいった。そして、生徒を2階の講堂に避難させることにした。西側から順番に避難させ、1階・2階に誰もいないことを確認したのち、自分も避難しようとした。

この時、児童の母親が子供のことを心配して迎えに来ていたので、「一緒に避難しよう。」と誘い、渡り廊下をわたった。半分まで渡ったところで、せきを切ったように後ろから濁流が流れてきた。後ろから来たので、その時までまったく気がつかず、あっという間に腰の高さまでの水がきて、倒れてしまった。

倒れた瞬間、「やられた。もう終わりか。」と思った。手をつないで一緒にすすんでいた母親の手も離れてしまった。流されはしたものの、右手がかろうじて柱に引っかかって助かった。しかし、足がすべり立とうにも立てなかった。柱につかまってこらえていると、隣に子供がいるのに気づいた。そして右手で柱につかまり、左手で子供をかかえふんばった。その後、ようやく2階にいた先生にみつけられ、助けあげられた。流された母親も、無事であった。

助けられ、やっと講堂に入ったが、足から頭まで泥だらけであった。生徒の人数を数えることにしたが、自分のクラスはすぐにわかったものの、隣の和田先生のクラスは、人数の引き継ぎをしていなかったので、全員そろっているかどうか確認できない。そこで隣のクラスの級長を呼んで、何人来ていたか尋ねたが、耳に泥が入っていたので聞こえなかった。報告のとき「村上学級、異常ありません。」とは言うものの、「和田学級、異常ありません。」とは言えなかった。

しばらく様子を見たうえで、水は引かないものの校舎内は土砂で埋まっているので、校舎の倒壊の危険はないだろうと思った。校舎に戻り和田学級の出席簿を捜そうと考えた。しかし階段の辺りは、流木でぎっしり埋まっていた。1本づつ抜いていき、ようやく、はって入っていける位の通り道を確保した。やっと入った和田学級であるが、出席簿がどこに

あるか、わからなかった。しかし、出席者の机には教科書と弁当が残っていることに気がつき、出席者の数を確認できたので、こんどは「和田学級異常ありません。」と確信をもって報告できた。

隣の校舎では、1階にいた生徒が、入ってきた水を見て慌てて逃げた。しかし、2階にいた生徒には伝わっていなかったので、逃げ遅れてしまった。その上、長さ10メートル位の松の木が、1階の中央部を教室と教室との間の壁を貫いて、流れて行ってしまった。大きな穴が開き、柱が潰れてしまった。2階にいた生徒は、潰れた柱の上にいると危険なので、校舎2階の西側に逃げた。(写真②)

2階西側に逃げ道も無く取り残された生徒を、なんとか助けようと思い、先生達は校舎内を何か助ける道具が無いかと捜し回った。すると、物置の中から当時日露戦争の時の戦利品といわれていたつるはしとロープがみつかった。渡り廊下の屋根を伝って逃げる方法しか考えられず、しかたなしに校舎の壁に穴を開けることになった。屋根を伝って逃げた者、約200人。一人づつなので、かなり時間がかかったが、一人も死傷者がでなかったのは、幸いである。

(1993年4月29日談)

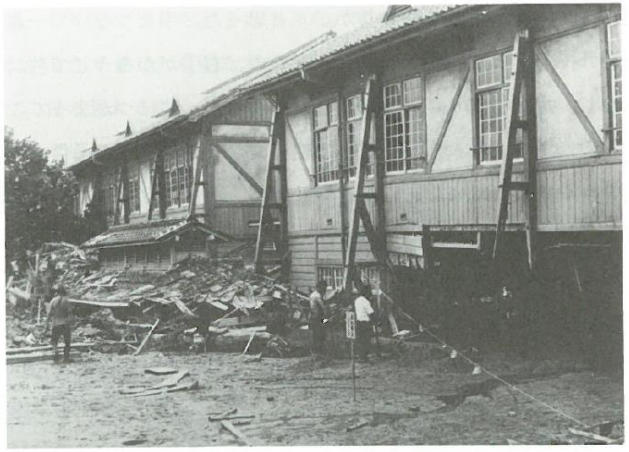


写真 ②

北山　幸さん

[女性、68歳、大正14年生、洪水当時 13歳]

住吉宮町二丁目のウソ川の側に合った、六軒長屋が流され四つ位の子供が、阪神の高架のところまで流されたらしい。

住吉小学校の校庭南西にあった柳の木に、大きな石と一緒に、子供を抱いたまま女性が

死んで引っかかっていたらしい。

*　　*　　*

(水害の当日、住吉小学校で実際に避難した話)

昼前、北校舎2階の裁縫室からなにげなく校庭の花壇を眺めていた。すると、茶色の水が流れてきて、そのうちに濁流になった。

自分が北校舎の裁縫室からロープを伝って講堂まで渡るとき、先生が「向こうのロープをしっかりとつかむんだぞ。手を放したら死ぬんだぞ。わかってるか死ぬんだぞ。足を滑らしたら濁流にのまれるんやから。下を向いたらいかん。このロープだけ見とき。」と言われた。渡る途中には三人位の先生が立っていた。一人渡るごとに先生が、「よし、偉かった。」と言って頭を撫でてくれた。ホッとした。あれは、先生のとっさの機転であったと思う。

電柱は倒れるわ、電線はぶら下がるはで、とにかくとても怖かった。

(1993年5月4日談)

奥谷アイさん

[女性、82歳、明治44年生、洪水当時 26歳]

洪水の当日、夫は仕事先の増田(東灘区岡本の旧家)に、給料を受取に出かけた。しかし、橋が落ちたため帰れなくなった。(上流より東谷橋、小峰橋、大谷橋、落合橋)

このころ、川の向こうにとり残された川下さんは、お腹が空いていたので、握り飯を作ってもらい、川の反対側から投げてもらって、食べたそうだ。

夫は、山伝いに帰ってきた。その時、近所に住んでいる西垣さんが、夫が山で番傘を振って合図していることを、教えてくれた。その時は、ただ無事に帰って来て欲しいという気持ちだけであった。皆、私の家の軒先で心配して集まっていた。(本山町中神楽橋)

洪水の様子といえば、住吉川の上流(現在のアトリエ水車・立岡さん宅)の方から、地震でもないのに木が動いて、立った状態のまま移動しているように流れてきた。ものすごく、こわかった。

ものすごいうねりが起こり、やっとうねりが通りすぎたとおもったら、ふなびきさんの家も水車も無くなっていた。その時の様子を、私は西垣のおばさんと2人で、家の風呂の窓から見ていた。ゴォウーという音がして、「ほんとに、えらい音がしてきた。どうなるんだろ。」と不安になった。今までに見たことの無いようなうねりが3回程きた。まさに

山津波という言葉どおりであった。

近所の水車小屋のおじさんは、雨がひどくなり危なくなる前に、奥さんと子供を避難させるために下におりた。そして、家に帰ろうとしても橋が落ちていたのでなかなか戻れなかった。数日して、家に帰ってみると、なにもかも、おいていた給料も、無くなっていたそうだ。あとで上にある私の家に来て、「何もかもなくなった。」と言って泣いていたのを覚えている。

山土の臭いがその後２～３日とても臭かった。このあたりの製粉所は、つくった粉を車で運んでいたのだが、水害で橋が流されたので、皆が担いで今の白鶴美術館の前の辺りまで運んだ。一つ運べばいくらという、いいお金になったので、皆奪いあって運んだそうだ。

自分の３男（昭和12年12月12日うまれ）が、水害のあと、急性肺炎にかかってしまった。でも、橋が落ちていたので、医者に観てもらうこともできなかった。８月２日になって近所の人達の協力で流木等を使い橋を作って、ようやく医者に観てもらうことができたが、すでに手遅れであった。（翌日、亡くなられたとのことである。）

（1993年５月９日談）

加 納 喜代子 さん

[女性、68歳、大正14年生、洪水当時 12歳]

当時、空区（住吉村）会館の付近に住んでいた。洪水の１週間位前から雨が降り続き、またゴゴゴゴとすごい山鳴りがあった。

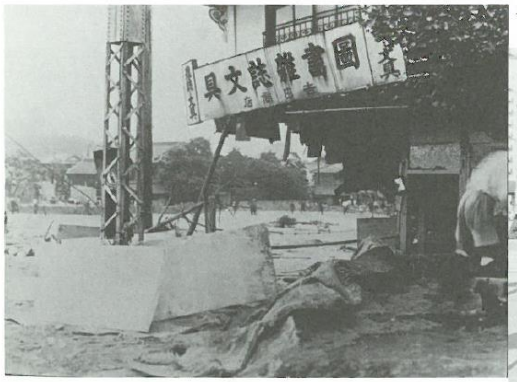
水害の当日、住吉川には畳６畳分位の石が流れていた。観音林の高級住宅も流されてしまった。

青年団の人達が、「とにかく大きい家に逃げろ」と言って、水の中をロープ伝いで避難。とにかく、逃げることで必死であった。

（1993年５月12日談）

当時の状況と現在の様子

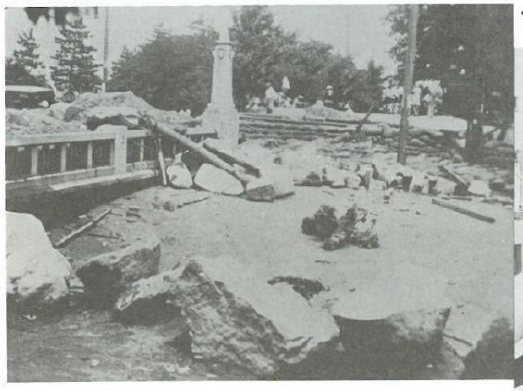
ＪＲ住吉駅付近

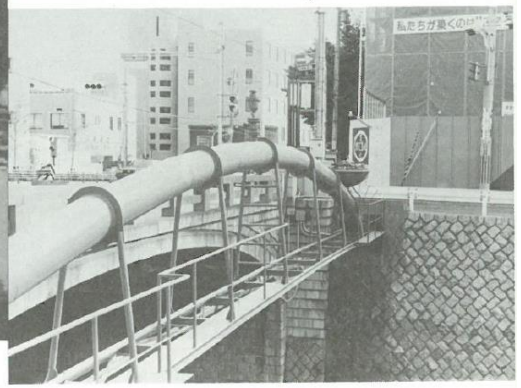


ＪＲ住吉駅の南

住　吉　橋

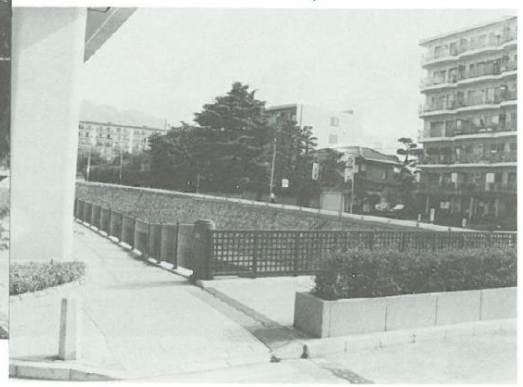
住　吉　橋



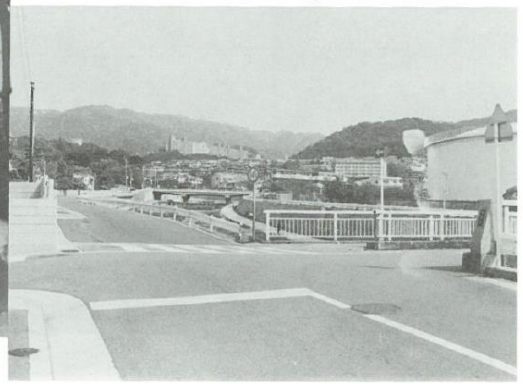


住　吉　川

反高橋の周辺

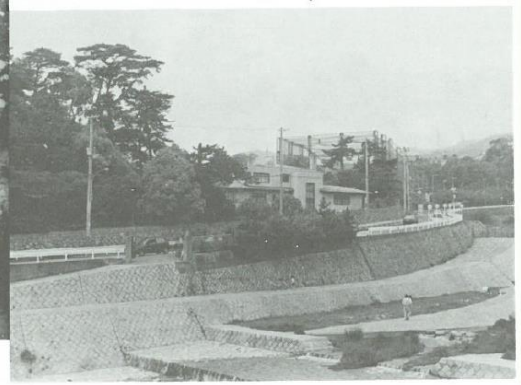


観　音　橋



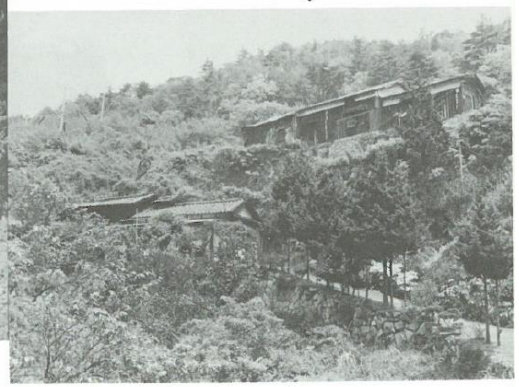
住　吉　川

白鶴美術館の南

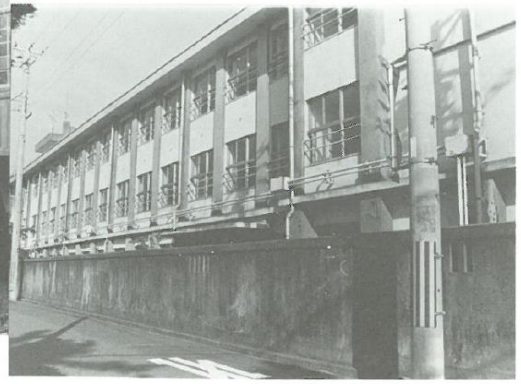


白鶴美術館

東谷水車小屋



住吉小学校



ＪＲ本山駅の西

ＪＲ住吉駅付近か

不　明

住吉川

住　吉　川

ＪＲ住吉駅を
東からのぞむ

ＪＲ住吉駅周辺か

梅の木巡査駐在所か

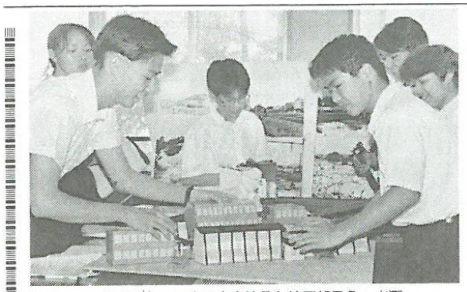
反高橋付近

東谷水車小屋

落合橋南　地獄谷第１号地

今回の活動についての公報活動

1993年(平成5年)6月11日　金曜日　神戸新聞



阪神大水害の研究発表を控えた地歴部員ら＝東灘区、赤塚山高校

あの阪神大水害 悲惨な光景 今に

赤塚山高地歴部が貴重な研究

きょう文化祭で発表

生々しい被災証言

当時と写真で対比　さまざまな資料駆使

東灘区の市立赤塚山高校の地歴部が、昭和十三年七月に阪神地区一帯を襲った「阪神大水害」をテーマにした研究を十一日、同校の文化祭で発表する。当時、被害に遭った人たちのところへ何度も足を運んで集めた体験談を中心に、さまざまな資料をまとめたもので、同部員らは「数字上のデータだけでは見えない生々しい災害の様子をとらえることができた」と話している。

同部員らが「史跡や資料だけでなく、人を通して地域の歴史を研究したい」と調査を始めたのは、約一年前。部長の池田将人君(三)が、地域のお年寄りとの雑談の中で、水害の体験を耳にしたのが始まりだった。提供してもらった災害当時の写真や新聞記事を手がかりに、七人の部員が町を歩き、当時を知る人たちの話を聞いて回った。

「地域の人たちとのコミュニケーションの大切さを感じた」と池田君。部員らが訪ねた人たちは三十人以上に上る。何度も足を運び話を聞く中で、次第に五十五年前の悲惨な水害の光景が浮き彫りになっていった。

「流れてきた大きな石で、家の柱が折れ、二階が傾いてしまった」「腰の高さまできた水の中に倒れた」「やられた、もう終わりか」と思った」「住吉川の方から足から髪まで泥まみれになった人たちが避難してきた」。同部がまとめた調査報告書の生々しい証言は水害の状況を克明に語り継ぐ貴重な歴史の資料だ。

文化祭では、これら証言のほか、被害直後の住吉小学校の復元模型や、被害当時と現在の写真での対比、気象台で集めたデータなども展示。災害の様子を多方面から検証した力作となった。文化祭は十一日午前九時から。一般の見学も歓迎する。

◆文化祭展示を広く地域の人々に知ってもらうために、新聞に掲載していただく。

地歴部より

来年度文化祭のテーマとして、「昭和13年の阪神大水災」について体験談や写真等（未発表のもの）の資料を捜しています。在阪神の方で、ご自身で体験された方のお話を、部員が聞き取り調査という形で訪問しています。

赤塚山高校の関係者の方で、実際に水害を体験された方がおられたらご一報ください。

◆赤塚山高校育友会報第63号に掲載してもらい協力を求める。

今回の調査に関する、活動日程

この１年間の、校外における調査活動の記録である。

(1992年)

７月18日	第１回座談会（御影：西方寺会議室） 西方寺の檀家の方々に戦前の、お話を伺う ≪研究テーマを、「阪神大水害の聞き取り」に決定≫
９月21日	神戸市立文書館で水害関係の資料を収集
10月26日	東灘区役所で水害関係の資料を収集
11月12日	神戸市律中央図書館において、神戸新聞等の水害当時の新聞資料をマイクロフィルム閲覧・複写
11月25日	建設省六甲砂防工事事務所において資料収集（治山についてのお話をしていただく。）
12月20日	綿谷さん宅訪問

(1993年)

３月23日	神戸海洋気象台で、洪水当時の気象データ収集
３月25日	第２回座談会（御影：西方寺会議室） 綿谷さん、日野さん、田中さん、安井さん
３月29日	部員各自の調査結果を持ち寄り、学習会 午後、神戸海洋気象台へ
４月25日	小野さん宅訪問（３時間以上お話していただく。藤岡米穀店を紹介していただく。）
４月26日	藤岡米穀店訪問（水害時の写真①「吉田文具店」の現在位置をお教えいただき、吉田さんを紹介していただく。）
４月27日	吉田さん宅訪問（村上さんを紹介していただく。また偶然通りかかった北山さんに体験談をしていただく約束をする。）
４月28日	部員全員で中間報告会（以後の方針を決定。）
４月29日	村上さん宅訪問
４月30日	田中さん宅訪問
５月１日	日野さん宅訪問
５月４日	北山さん宅訪問
５月９日	奥谷さん宅訪問
５月11日	綿谷さん宅訪問
５月12日	吉田さん、加納さんの体験談

≪これ以降、文化祭展示にむけての準備に入る≫

６月11日	構内文化祭展示
７月23日	神戸海洋気象台で、洪水当日の雨量データの疑問を尋ねる
９月17日	建設省六甲砂防事務所訪問（現在の治山の問題点を伺う）
９月18日	神戸市消防局東灘消防署訪問（現在の防災対策を伺う）

今回の調査に音協力くださった方々、及び諸機関

（順不同）

＊（聞き取り調査について）

綿谷輝郎さん	日野富弘さん
安井年夫さん	田中三千代さん
田中みよこさん	小野　栄さん
吉田和子さん	北山　幸さん
村上吉胤さん	奥谷アイさん
加納喜代子さん	

西方寺（御影）	神戸深江生活文化史料館
神戸海洋気象台	建設省六甲砂防工事事務所
東灘区役所	神戸市立住吉小学校
藤岡米穀店	神戸市立文書館
神戸市立中央図書館	神戸市消防局東灘消防署

＊電話での問い合わせに丁寧に応対してくださった機関

白鶴酒造	関西電力
阪急電鉄	住吉学園
神戸市広報課	

以上の方々、諸機関にお世話になり、今回の調査をすすめることができました。

聞き取り調査を終えて

運動部のような派手な活動もなく、また対外的な活動もほとんどない我が校の地歴部は、２年前わずか２名の部員で、存続が危ぶまれていた。他校との交流を考え相手の高校を捜したが、神戸市内の公立高校普通科で活動中の歴史関係の部活は一つも存在せず、途方にくれてしまった。書物を調べるだけでなく、積極的に校外に出て活動する方法が、何かあるはずだ。そこで決まった方針が、「聞き取り調査」で地元の歴史を探るというものである。

調査を終えて考えると、確かに幸運にも恵まれ、多くの方々の御協力をいただくことができた。しかし、それは決して簡単なことではなく、例えば、門前払いにあうことも、生まれてはじめて経験した。また、お話を伺うことができたとしても、半世紀以上も昔の出来事なので、記憶に曖昧な部分が多く、お話が二転三転するなど聞き取り調査の限界も感じた。しかし、それは『神戸市史』や『住吉村誌』に登場する記述や数字からは、おそらく知ることができない、生々しい一個人としての体験談であった。

無理をしてでも記録に留めておかなければ、知る人もいなくなり、その事実すら忘れ去られてしまうというのが現実ではないか。

この調査で一番嬉しく感じた事は、最初は気難しそうにみえた方が、私達が通う間に、孫の相手でもされるようにかわいがってくださったり、話が横道にそれた時など、いろいろな世間話をしてくださったり、新しい資料を探してくださったりしたことである。また、わざわざ学校の模型までつくって説明していただいたこともあった。その度に、私達の活動に対する地域の人々の関心の強さや、期待の大きさを伺い知ることができ、この調査における私達の責任の重さをあらためて実感した。

最も強く感じた事は、地域の人々とのコミュニケーションの大切さである。聞き取り調査では、ある程度個人のプライバシーに立ち入った事柄まで尋ねなければならないが、特に初対面の人からは、たった一度の訪問ではこちらの望む話も引き出しにくく、一朝一夕には成果をあげることができないということである。地域の歴史を探ろうとするならば、普段から気楽に話をしていただけるように地域の人々と絶えず関係を保ち続ける努力が不可欠だといえる。今回の調査で、今でも表沙汰にできない洪水時の地域間のトラブルの存在を知った。私たちを信用してくださり、報告書等で表沙汰にしない約束で、お話いただいた。ショッキングな事実にたいへん驚き、災害が目に見える形だけではなく、人々の心

に様々な見えない傷を残すことを知った。

また、調査の途中に何度も感じたことがある。それは、以前郷土史研究家の方にお教えいただいたことである。大人が個人で何か調べようとしても、地元の人間でないかぎり、怪しまれて思うように調査が進まないことがあるといこうとだ。私達は「赤塚山高校の地歴部の者です。」と名乗る度に、人々の顔がパッと親しみをもった表情に変わるのを経験した。高校生に対する温かい気持ちを、いつも感じながら調査を進めていた。本当に感謝している。

最後に、特に御年配の方々は、私達に何かを伝えたいと思われているように、強く感じた。そして、私達も人生の先輩から、もっと積極的に多くの事を学ぶべきだと思った。

このように貴重な体験をさせていただいた私達は、失われつつある事実を可能な限り書き留めて後世に残すことを、今すべき一番の仕事だと考え、今後も努力を続けていきたいと思う。

1993年10月

神戸市立赤塚山高等学校
地　歴　部

1993年度　地歴部部員

3年生	池田　将人(部長)	蔡　瑞豊(会計)
2年生	岩本美和子	高瀬　雅弘
	瀧本　　渉	田中　宏治
	多田　勝紀	
1年生	山崎　智彦	